

## 現代における「教育」と「僧侶育成」

二〇一九年十一月十九日、第八回宗門教学会議が開催され、本号は、後半（前半は『宗報』八月号に掲載）として、全体討議の内容を報告いたします。

今回のテーマは、〈現代における「教育」と「僧侶育成」〉です。

近年、「教育」は大きなテーマとなっています。例えば、文科省による「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」では、今後さらに進展していくと予想される国際化・情報化といった社会の変化に対して、迅速に対応するための「教育」の在り方を提示しています。宗門においても、『宗報』二〇一六年十一月・十二月合併号に発表された「10年、20年後の日本社会で求められる僧侶像・寺院像答申書」において、

「この僧侶なら」「この寺院なら」というように、自身にとつて価値を感じるか否かに従って、僧侶や寺院を「選ぶ」時代になると述べられ、「選ばれる」に相応しい「僧侶」となる必要性と、そのための育成体系を再構築していく必要性が訴えられ、二〇二〇年度より得度規程が刷新されました。

宗門教学会議は、宗門内外から提起される現代的課題や問題について、先見的知見を有する有識者からご提言をいただき、宗教者の持つ知見が現代社会において、どのような位置にあり、よりよい社会の創造のためにいかなる役割を果たし得るか、宗門の確たる方向性を考えていく会議と位置づけられています。

そこで、本年度の宗門教学会議では、急激に変化していく社会の中で、「求められる・選ばれる僧侶」をいかに「教育」し「育成」していくかを課題として開催するに至りました。

第八回宗門教学会議では、会議委員として龍谷大学社会学部准教授の猪瀬優理氏、龍谷大学文学部教授の中西直樹氏、龍谷大学付属平安中学校・高等学校校長の関目六左衛門氏、勸学寮頭の徳永一道氏をお招きしました。座長は、浄土真宗本願寺派総合研究所長丘山願海、司会は、浄土真宗本願寺派総合研究所副所長の満井秀城が務めました。

○満井 最初にご発題いただきましたのは、猪瀬先生です。特に創価学会の組織的な在り方ということを通して、次世代の幹部、あるいは後継者を、どう育てていくかということの一つのモデルをご提示くださいました。

創価学会の教団というか、システムの中で、われわれが学ぶべきところ、参考になる知見ということをご紹介いただければありがたいと思います。

○猪瀬 最後詳しく紹介できませんでしたが、天理大学の先生で、天理教の教師でもいらっしゃる金子昭先生が著書の中で、「現代の多くの宗教教団がいずれも伸び悩んでいるのは、代を重ねた信者たちにとって信仰に自尊心や誇りが感じられなくなったからでは」ということを書かれています。伝統宗教は伝統であるが故に、安定しているが故に慣習化してしまっているというか、一人ひとりの中に私の人生に何の意味があるのかということとを問い直すような契機が少ないのかもしれないということとは、感じるところ

があります。

逆に門徒さんでも熱心な方は、お寺に関わることの、自分にとっての意味を常に問い直されている方が多いように感じています。こういったところは、宗教にとつての大きな役割だと思えますので、もう少し積極的にしていく観点があったらいいのかなと思っています。

○満井 猪瀬先生のご発題について、関目先生、中西先生から、何かございましたら、ご発言をお願いします。

○中西 ふと思いつきましたが、私は学生に、日本脱カルト協会のビデオを見せることがあります。その中で、いきなり信仰というものが、自分でまだ確認できないのに、すぐに布教をせよと言われる。自分の確証がない中で布教を強要されることによって、むしろ教団への帰属意識を強めさせられて、そこから抜け出せなくなったというようなインタビューがありました。言い方は悪いですが、自分が布教することによって、その教団の中に巻き込まれていく。布教せよ、布教





## 関目六左衛門氏

### 〔略歴〕

龍谷大学付属平安中学校・高等学校校長。一九七四年龍谷大学文学部史学科東洋史学専攻卒業。同大学院文学研究科東洋史学専攻修士課程修了、京都市立西京商業高校（現在の西京高等学校）勤務。堀川高等学校を経て、教頭として再び同校へ戻り、二〇〇三年に校長に就任。二〇一八年四月より現職。

よね。

ただおっしゃるとおり、「はっ」と気付いたときには、何かに巻き込まれて、

自分は、本当にこれでよかったのかと思う局面は、おそらく来る人は来るんですね。そういう意味で、創価学会も全部いいとかいうことではなくて、駆り立てられるようなところはあるので、その結果、ここを病むような会員さんもおられるとは思いますが。

○関目 学校の中では、旧来の学校教育の形態があります。例えば、学校には黒板があり、そして教壇があつて、生徒の座っている場所よりは一段高くなっている。生徒は、皆、黒板、教師の方を向き、教師一人だけが黒板に背を向けて、生徒

に講義、授業をするわけです。

その一方、アクティブラーニングというかたちがあります。私は西京高校（京都市立西京高校）の建築にも関わったんですが、教壇をなくしました。子どもたちが一方通行の授業で受け身ばかりで何かを学び取るのではなくて、お互いが意見を出し、主張し合い、お互いが肯定をし、否定をする。そのやりとりの中で、みんなが全体として知識をつかみ取っていくというものです。

例えば、伝統的な宗教教団では、信者・門徒さんと僧侶の方との間に、職位・役割の違い、教える側と教えられる側という違いができてしまう。ところが新興宗教というのは、そこまで歴史も組織も、

せよと、強要されて、それによって、ほんとうは嫌なのにその教団から抜け出せなくなる。そういう場合もあるというふうに理解できるのですが、こうしたことについてご意見をうかがいたいと思います。

○猪瀬 創価学会の場合は、自らは唯一絶対正しい宗教と認識していますから、創価学会の教えを、まず受け取って、まだ十分に理解していないうちからも布教します。何でもそうですけど、教えを受ける人よりも、教えている人の方が、理解が深まるということは、よくあります

ある意味きっちりしていない訳ですか

ら、学びながら人に教えていく。若い人たちに、自分も主人公なんだというような自尊心とか自覚を与えて、教団が活性化しているというようなシステムを意図的につくっておられるのでしょうか。

○猪瀬 おそらく意図的にされています。一人ひとりが主人公になるということに、そこに意義を見いだすということの方が大事だと思います。

創価学会にしましても、立正佼成会にしましても、やはり一番大事なのは座談会とか講座と言われます。信者さん同士が、今、こういうことを困っているとか、それは信仰の観点から見たらこう思うよとか、お互いの話、悩みとか考えをやりとりする。そういった場面で話すことによって自分のこともわかってくるし、他の人に共有してもらうことで孤独でもなくなる。そういったところを認識できるというのは大事だと思います。

○満井 ありがとうございます。徳永寮頭、お聞きになりたいことはございま

すか。

○徳永 今日のテーマは現代の教育とありますが、これは一般教育ですか、宗教教育ですか。それと、「教育」と「僧侶の育成」は結び付かないですね。

私は、宗門関係学校というのは、ものすごく大事だと思っています。これは、財産ですよ。そこでの宗教教育というのは宗門の宗教教育ですね。これは、非常に大事なもので、一つの理想は京都女子大学だと思います。それともう一つは、宗門の僧侶の養成です。これはまた別の問題ですよ。私は今、宗学院で教えていますので、関心はあります。

この二つは、別にして議論しなければならぬと思いますね。

○満井 今ご指摘いただいたことと深く関連するのが中西先生からのご発題でありました。近代の本願寺における学問と言いますか、大学制度、教育制度というものについての変遷を、非常に細かく丁寧にご説明くださいました。

○中西 先ほど徳永寮頭がおっしゃった

ことと関連して、やはり僧侶育成の問題と、学校教育において、一般学生に仏教主義教育をどうするかという問題は、これは一緒にしてはいけないと思います。龍谷大学の場合ですと、真宗学・仏教学を専門とする研究者を養成することと、一般学生に対して仏教主義教育をどう行っていくかということも別の問題として考えるべきだと、私は思います。

○満井 藤丸副所長は、いかがでしょうか。

○藤丸 私自身も龍谷大学の「仏教の思想A・B」を教えた経験もあって、どう学生に伝えるかというのは非常に悩ましいところでした。それでは京都女子大学などでの仏教の伝え方というのは、どういう特徴があるのでしょうか。

○徳永 京都女子大学の仏教教育は、龍谷大学に比べてずっと厳しい。けど学生たちは、それをかえって楽しみにしているようなところがあります。

○中西 龍谷大学は一年間、通年四単位です。京都女子大学の場合は、一年で



やって、また三年でやりますので、八単位です。筑紫学園大学の場合は、一年、二年の計八単位です。私は実際に調査したのですが、その他にも色々なことを工夫しているんですね。京都女子大学は、「文部省訓令第十二号」の関係で、戦前の高等女学校の時代は、宗教教育を禁止されていました。そのなかで、どういふふうにして宗教的なエッセンスを伝えるかということ、ずっと苦労してきたということがあるわけです。

もう一つは、龍谷大学に来て私は思うんですけれど、いろいろな宗教行事やサークル活動を全部寺族がやってしまうんですね。ところが京都女子大学とか筑紫学園大学はそうした方がほとんどいませんから、宗教教育に率先して関わってくれる学生をうまく具合にとり込んできて参加してもらっている。

○丘山 あらためて先生方に問い直したんですけれども、例えば、やる気をどうやって起こすか。宗門は世襲制が基本で、やる気があって来る子もいれば、

嫌々ながらの子もいる。そういう子たちに、どうやってやる気になってもらえるか。嫌々な子にいくら専門用語で伝えても、特別な技術を教えても、なかなか活用しようと思わない。

もう一つお伺いしたいのは、宗教的感性は育てられるのか。人のためになにかやりたいという感性は育てられるものなのか。

○関目 義務教育は中学校までなんですけど、今、結構多いのは、子どもが高校へ行きたくないというよりも、高校へ行くことにそんなに大きな特別の意味を持たないということです。こういう時に、「おまえは、やる気がないからいかん、駄目だ」と言っても、やる気は起こりませんから、クラブ活動など本来の授業以外のところの役割が非常に大きくなってきました。

だから、学校の教師という職業がブランクと言われるゆえんは、授業をきちっと成立させようと思うと、授業以外の学校教育活動の中で、子どもたちが自



分の存在感をはっきりと見いだして、自尊心を持って、そういう周辺から埋めていくしかなかったんです。

そうすると、本来家庭がやるようなことまで教師が手を出してしまつて、「おまえは、こんないいところがあるじゃないか。そこまでじゃないと思つていたけど、おまえ、やつたらここまでできるじゃないか」というようなところから、あの意味では、生徒と教師という関係からちよつと外れたところの人間関係の中から、本来の教師と生徒という関係に戻させていくことが必要になってきました。

○満井 関目先生のご発題に関わつて、

先生は、公立学校、私立学校のどちらも関わつてこられて、両者の関連についてご指摘くださいました。この状況は、伝統教団も重なる部分があるんじゃないかと思つています。伝統的な伝道組織というものが機能していたことに安住するのではなく、ここを、どう乗り越えていったらいいのかということ、教育者の視点でご提言いただきたいと思つています。

○関目 全人教育とか、いろいろな言葉を使いますけれども、やはり、今の時代は、狭い目的というものを明確に打ち出して、その目的に賛同する人間だけを集

める。そうでないと、不本意入学になつてしまつて、建学の精神とか、その学校が何のためにあるのかという目的とは別の要素、偏差値などで入ってくる人間というのは、本当にかみ合わないんですね。

また、教師にも学校にも昔のように權威というものがなさだろつと思つています。例えば、今、保護者会の方々と教員を一緒にしますと、一番学歴が低いのは教員かもしれないんです。昔ですと、私は滋賀の田舎でしたから、村の中で旧制中学校以上を出ていらつしやる方と言えば、庄屋さん、地主さんか、お寺の和尚さんぐらいしかなくて、あとは、みんな尋常

## 中西直樹氏

### 【略歴】

龍谷大学文学部教授。一九八八年龍谷大学文学研究科修士課程国史学修了、二〇〇五年筑紫女学園大学助教授、二〇〇七年筑紫女学園大学准教授、二〇一一年龍谷大学文学部准教授を経て現職に至る。専門は、日本仏教史、特に近代における仏教者・教団の動向。著書に、『仏教婦人雑誌の創刊』（共著・龍谷大学仏教文化研究叢書、法蔵館、二〇一九）、『資料集・戦時下「日本仏教」の国際交流第Ⅴ期チベット仏教との連携』（共著・不二出版、二〇一九）など多数。



## 猪瀬優理氏

### 【略歴】

龍谷大学社会学部准教授。博士（行動科学）。二〇〇五年、北海道大学大学院文学研究科博士後期課程修了、二〇〇七年、北海道大学大学院文学研究科助教、二〇一一年龍谷大学社会学部講師を経て現職。浄土真宗本願寺派総合研究所委託研究員。宗教におけるジェンダーや世代に関わる問題を研究している。主な著書に、櫻井義秀編『宗教とウェルビーイング』しあわせの宗教社会学（担当）第七章 水子供養は何を癒やすのか、北海道大学出版会、二〇一九、大谷栄一編著『ともに生きる仏教』（担当）第五章 女性の活動―広島県北仏婦ビハーラ活動の会、ちくま新書、二〇一九）など多数。

小学校を出たぐらいでした。

しかし、今は、昔みたいに、何か、一般人の人とは違う経済力とか、社会的地位を背景にした人を圧倒する権威というものがある、もう通用しない時代です。だから、個人の肩書とか職業ではなくて、結局は、その人の感性的な側面、個人の人間性だけが人を引き付ける要素になってきてしまっています。

○中西 ちよつと違う観点からですが、私は、戦前、宗教教育は私立学校ではできなかつたという話をしました。それが戦後、私立学校は宗教教育をしてもよい

ということになった。これはなぜか。戦

前の私立学校は公教育に従属していた。ところが私立学校は公教育の一貫を担うとともに私教育を行うことに存在意義があることが認められた。要するに個人の内面に踏み込んだ教育が可能なのである。親鸞聖人の建学の精神ということを表明して学生を集めているから、当然、ある程度、宗教教育や宗教行事を行うことができるんです。

ところで、家庭教育は完全に私教育です。そして、その最たるものが宗教教育です。完全な公教育機関である公立学校

は、中立性を担保するため、この個人の

内面に踏み込んだ私教育を行うことはできない。しかし、私立学校の場合は、そこに踏み込める。そのことを通じて学生と教員の関わりが近くなるということもあると思うんです。

だとすれば、宗教の時間以外に、平安高校が宗教教育をどのようにやって、そのことを通じて学生に宗教の重要性、教えの重要性を伝えていらいっしょやるか。

○関目 宗門校の役割というのは、公教育の一環ですので、布教活動を行うわけにはいかないわけですが、ただ学

校の指導の全ての根幹に建学の精神を置く。その言葉、精神でもって、一事が万事全ての生徒指導を展開するということが、宗門校の役割ではないのかなというふうには思っています。

○満井 徳永寮頭、今までの議論を受けて、一言コメントをいただけますか。

○徳永 宗門の関係学校は何も付け足すことはありませんね。あとは、教員の養成ですね、関係学校の教員です。これは宗門人であるなしにかかわらず、養成に力を入れていただくことですね。それぐらいいいかなと思いますよ。

○満井 お一人ずつ、最後にメッセージを一言ちょうだいできればありがたいです。

○猪瀬 どうやって宗教的感性を育てるのかということは、やはり僧侶、宗教者の根底には、そういったものが必要だと思っているので、育てるべきものだというふうには感じます。

どうやってそれを育てるのかということについては、創価学会から学べること

は、すごく励ましというのを大事にするんですね。あなたを見ているよと、あなたを信じているよ、といったことです。そうすると受け取り側は、私を見てくれているというところで、宗教的感性のその種のような、自分は見てもらった、励ましてもらったことを誰かに返したり、返報性の思い、そういったところが生まれてくるのかなというふうに感じることがあります。

あと私は宗教関係学校の宗教教育に関して、宗教系学校の宗教教育担当の先生にインタビューをして回ったことがあります。印象的だったことは、宗教教育で何をしているのかについて、揺さぶりをかけると言っておられました。宗教というのが、私は何者かとか、そういう問いを起こさせる。それも種ですよ。宗教的感性の種が、そこで生まれさせられるような問い掛け、そういったことをしていくのが宗教の科目の役割だと思っただけというふうなことをおっしゃっていた方が何人かおられて、なるほどなど感じ

たことがあります。

○関目 僧侶教育をする際に、寺院出身の方というのは、小さなときから朝晩のお参りの中で身に付けたものを持っているらして、最後の資格を取るといふ部分について、ご本山で最後の決めの教育を受けられる。

私どもが一番問われるのは、高校を卒業する生徒の成績は教科担当の教員が付きますが、実は、卒業の認定は校長しかできないんです。そのときに大学の先生方から、特によく言われるのですが、質の保証です。やっぱり宗門校であろうと、公立であろうと、校長を務めますと、高卒者として送り出した生徒たちの質の保証が万全だったかなというの、やっぱり一番気になりますし、これが一番大きな課題でございます。

○中西 一つだけ。私、実は、まったく在家の出身で、家は天台宗なんですけれど、龍谷大学に入って、赤松徹真先生ゼミの一期生になりました。赤松先生には色々お世話になり、どうしてそんなに親



身になって指導してもらえるのかと聞き  
ましたら、国立大学の学生は、ほってお  
いても勉強をするが、私立大学は、指導  
をしていかないとなかなか勉強を続けな

いということ、ずっとお世話になって  
います。その中で、先生は一度も得度し  
ると言ったことはありませんでしたけれ  
ど、やはり思うところがあって、得度しま

した。そういう教育というものが、やっ  
ぱり私立学校、私立大学、特に宗門大学  
には重要なんじゃないかなと思いまし  
た。

## 閉会 座長あいさつ

総合研究所 所長

丘山 願海

本日は先生方、ありがとうございます。ま  
す。さまざまな貴重な意見をいただき  
き、今後の宗門のために生かしていき  
たいと思います。

今日、関目先生が概略で教えてくだ

さいましたけれども、日本では戦後だ  
けでも、いろいろな教育の変革期があ  
るわけです。ただ宗門は、ある意味で  
はずっと大きな変革をせずに今に来て  
しまっ、どうしようといふふうに行

き詰まっているところだと思っ  
す。ただし、そういう節目、あるいは  
本当に難しい状況というのは、ある意  
味では、大きく変えていくチャンスで  
もあると思います。

教えというのは、人から人に伝わっ  
ていく。あるいは、出会いこそ人生の  
全てだといふふう「言われまされど  
も、私は、「自他共に心豊かに生きる  
ことのできる社会の実現に貢献する」

ということは、誰でもが願っているこ  
とだと思えます。「自他共に」という  
のは、その出会い、教育の場での出  
会いとか、こういう宗門の中での出会  
いが、ゆくゆくは、大きな原動力にな  
る。本当の仏法というのは、そういう  
ものだと思っんです。人と人が共に  
生きることの素晴らしさを伝え合え  
る。

今日、いろいろご意見をいただいた  
ことを、さらに今後の宗門の中で人材  
育成に生かしながら、結局私たちは自  
信を持って素晴らしい仏法を伝えてい  
くんだという思いを、新たにさせてい  
ただきたいと思っています。